

特報部

FAX 03 (3595) 6911 Eメール tokuho@chunichi.co.jp

ブッシュ政権のイラクへの米軍増派の決定を受け、米国各地で反戦運動が再燃している。集会には「ベトナム反戦」世代も登場した。日本でも「護憲」など地道な運動がある。しかし、現状は世論を揺るがす規模ではない。何が違うのか。日本の「ベトナム反戦」経験者たちに問うと一。

米軍撤退を掲げ、ワシントンの連邦議事堂前で一月二十七日に催された反戦集会には数万人が集まった。その中で、ひときわ目を引いたのは女優シェーン・フオンダさん(66)の姿だった。フオンダさんの反戦集会参加は三十四年ぶり。壇上から「沈黙はもはや論外だ」と増派阻止を訴えた。日本でも二〇〇三年三月のイラク反戦集会(東京)には約四万人が集まった。だが、参加者規模でみる限り、運動は急速にすぼんだ。一方、改憲の動きが顕在化する中、知識人の護憲

米で反戦再燃 日本燃えぬワケ

「平連世代」いま、動かねば

「原則」なき時代

生き方示せない

団体「九条の会」に賛同する地域組織の発足が各地であるものの、世論を左右するまでには至っていない。ベトナム反戦の声が世界に広がった一九六〇年代、日本にも市民運動をけん引した「ベ平連(ベトナムに平和を)市民連合、七四年一月解散」があった。当時、その代表を務めた作家の小田実氏は「米国の運動も最近になって盛り上がった。運動は連鎖反応を起すから日々の地道な活動が大切。日本でも『九条の会』などで皆、地道にやっっている」と強調する。「ただ、マスコミの無視

はひどい。いま、人々は安倍政権に『いくら何でもひどすぎる』という感情を持つてきている。結局、マスコミは表層しかみていない」と批判する。六七年に大学に入学し、ベ平連に加わった作家の吉岡忍氏も「たしかにベ平連は六五年に結成されたが、六七年十一月に脱走米兵の支援を始めるまで、東京の月一回のデモも数千人程度だった」と振り返る。ただ、同じく当時、ベ平連幹部で、ニューヨーク州立大で教えた経験もある評論家の武藤一羊氏は日米で



34年ぶりに反戦集会に参加したシェーン・フオンダさん(手前)は「沈黙は論外」と訴えた。日本でも連帯の輪は広がる「ロイター」

「日本には戦後、『平和と民主主義』という戦前経験の背景にした原則があった。原則とは踏みにじられることを許さない大切なもの。これが冷戦終結もあって九〇年代半ばに崩れた。米国の原則は『自由』。これは戦争の動員力になる危険もあるが、今も反戦運動の背骨にもなっている」六〇年代の全共闘や反戦運動は旧来の「平和と民主主義」を批判したが「それも主流に対する批判であって、こうした運動は主流への依存からは抜け出せなかった」と説く。そのうえで「戦後の遺産を引き継ぐ、そして一国的ではない『原則づくり』が問われている」と語る。旧ベ平連事務局長で、護憲団体「市民の意見30の会」で活動する吉川勇一氏は「九条の会を批判するわけではないが、高齢者が集まり、まだ仲間がいると安堵している雰囲気がある。これでは世論の基準は変わらない」と辛口だ。ちなみに同氏ら「市民意見広告運動」が編集した護憲パンフレットは増刷を重ね、現在一万五千部を超えた。さらにこう続ける。「(反戦運動などに)若者がいないのは困ったことだが、嘆いてみても仕方がない。というより、現在の政権の動きをみれば、それを悩む余裕はない。私を含めて高齢者が最後のエネルギーを振り絞る。それが若い層にも影響を与えていくのではないか」前出の吉岡氏は「デモや集会を規模で判断しても仕方がない」と前置きし、自らにもこう課題を課す。「自分たちがベ平連に参加していたころ、政治的なスローガンより、一回りも上の運動に携わる大人たちをみて、その生き方にひかれていたところがあつた。知性とか哲学という面だ。生き方をどう示しているのか。それがいまは自分たちの世代に問われている」とだと思つ」

ニュースの追跡

馬ノミレタ可主、馬ノミノ文字ニシテ...

髪いらずで、白髪の手入れがグ〜ンと手軽に!

ヒカンタンに、しかも、しっかりと白髪のお手入れができれば...。そのようなご要望にお応えする、染毛ジェル「カミクローネ」。染めた後の洗い流しがいらす。スタイリング感覚で髪に塗布&ブラッシング。染め、部分染めも自由自在で、しっかりと染め約1ヶ月間色持ち。1本で全体染めなら約4回(ショートヘアで)使えます。的でしかもカンタン・便利にすぐ染まる「カミクローネ」。きつと白髪染をされる方には手放せない白髪染毛料です。



洗髪い
カンク
白髪染
自然な光で染
新・白髪染毛